

Letters of the

**SHELLEY
COLLECTION**

Number 4 February 1990

The Bunkyo University Koshigaya Library

Kenneth Neil Cameron と Donald H. Reiman 編集による浩瀚な8巻本 *Shelley and his Circle: 1773-1822* が1986年ようやく完成した。第1巻が出たのは1961年であるから、実に25年という歳月を費やしたわけである。全巻揃ってから3年が経過したが、この膨大な『シェリーとその周辺』を自在に使いこなした本格的研究は未だ現れてはいないようだ。それだけ圧倒的分量というべきなのかも知れない。ここに収録されているのは、シェリー研究の一大中心地であるアメリカの The Carl H. Pforzheimer Library が所蔵する450を超えるマニエスクリプトに、他の図書館等から使用許可された分を加え、書簡を中心とする770余点である(ただし Esdaile Notebook を1点としている)。ただこの数字自体はさほど大きいものではないかも知れない。例えば Frederick L. Jones の編纂した *The Letters of Percy Bysshe Shelley* (1964) には小切手を含む745点の書簡が収められているからである。

しかし『シェリーとその周辺』の特長は、その表題から窺われるように、単にシェリーのみならず、その周辺の多彩な人々の直接資料が惜しみなく閲覧に供されていることである。例えば文人に限ってみてもゴドウィン、メアリー・ウルストンクラフト、ハント、ピーコック、バイロン、ホッグ、トレローニーそしてメアリー・シェリー、という具合で

原田 博

ロバート・フエローズ	サミュエル・パート	見落とされた連環●●	P・B・シェリーの
------------	-----------	------------	-----------



ある。以上がシェリーを中心とする高い連峰であるとすれば、これらの峰一つ一つが更に独自の丘陵（例えばティモシー・シェリー、メドウィン、クレア・クレアumontあるいはグイッチョーリ伯爵夫人等々）を従えているのである。山並40にも及ぶ巨大な山脈といえる。今さらながらシェリーを取り巻く人脈の多士済々ぶりに驚かざるを得ない。

編者キャメロンは、この壮大な人間絵巻を4代にわたる家族の肖像を描いたトーマス・マンの大河小説『ブッデンブローク家の人びと』になぞらえたが、それも故無しとしない。この絵巻物は単に空間のみならず、時間的にも大きな展開を見せているからである。つまり父ティモシーからシェリーを経て、シェリー死後のメアリーそしてその子パーシー・フローレンスに続くシェリー一族とその周辺の人間ドラマが織り成されているのである。ただし今回の選集は、1822年のシェリーの死をもって一旦完結している。キャメロンによれば、それ以降の分としてこれら関係者の1200点にも上るマニュスクリプトを収集済みであり、いずれそこから再度選集を編みたいという意向もあるようである。完成した暁には、学界に測り知れない貢献となるであろう。

『シェリーとその周辺』には2、4、6そして8巻目に固有名詞の詳細な索引が付けられている。おびただしい数の人名が列挙されている中で、拙稿の表題に掲げた Samuel Parr (1747—1825) が1巻目に5箇所、6巻目に1箇所言及されている。本選集の巻頭を飾るマニュスクリプトは、ゴドウィンが1778年5月25日付けをもって授与された Coward's Academy の卒業証書である。編者キャメロンは、その掲載に先立ちゴドウィンの生い立ち、思想及び作品等をかなり詳しく解説している。その際ゴドウィンが残している「自叙伝的覚書」と「日誌」という貴重な資料を随時引用している。そこにパーがたびたび登場している訳である。

例えばゴドウィンは、1796年4月22日私邸での晩餐にパーを娘共々招待していたし（列席者の中には後ゴドウィン夫人となるメアリー・ウルストンクラフトもいた）、あるいは翌1797年9月13日には手紙を書き送ったことを記している。本選集で引用されているパーとの交際の最も早い記録は、1794年である。DNB は、二人は親友というほどではなかった、と伝えているが、ともあれ『政治的正義』の出た1793年以降頻繁につき合うほどの仲であったことは明かであろう。これをもってしても、パーはシェリー・サークルの準会員程の資格はあるのではなからうか。

ところでシェリー自身パーと何等かの面識はあったであろうか。少なくとも二人を引き合わせようとした動きはあったようである。その一つが菜食主義者達の経路を通してである。周知のように、*A Vidication of Natural Diet* (1812) というパンフレットで、菜食主義者 J.F. Newton と Dr William Lambe に言及している。後にシェリーはこの兩名と面識を持つようになる。話しはだいたい飛ぶが、1818年4月30日シェリーはホッグに手紙を書き、その追伸の中で Dr Lambe 父娘に挨拶や言付を依頼している。この追伸に寄せたキャメロンの注によれば（各マニュスクリプトに付けられた、長大にして細心の解題が本選集の価値を倍ならしめている）、ラムはパーやかの Walter Savage Landor と大の親友であったことが分かる。余談であるが、ホッグは1825—26年にかけて大陸旅行をした際、ラムの紹介状を携えて当時フィレンツェにいたランドーに会ったそうである。

ところでホッグはその *The Life of Shelley*, 2 vols. (1858) で、パーの肖像画家を通してパーと面識があったことや、その画家がシェリーとパーとを引き合わせようと骨折っていたことなどを伝えている。結局は実現しなかったようであるが、シェリーの伝記で最大のものをうちたてた N.I. White の *Shelley*, 2

vols. (1948) は、これを1813年の出来事として追認している。更にホワイトは、この計画を実現させようとした別のシェリー人脈の可能性も二三列挙している。また最近出た Peter H. Marshall の *William Godwin* (1984) によれば、1817年先妻ハリエットとの間に出来た子供の養育権をめぐる裁判では、パーがシェリーのために大いに尽力したと指摘している。

こうしてみると、シェリーとパーとが会見した形跡はないにせよ、二人は共通の知己を通してお互い好意的に意識していたことは間違いないようである。ただしシェリーがパーの存在を知るようになったのは、1809年1月14日施行されたオックスフォード大学総長選挙の頃迄遡るかと推測される。この選挙にはカトリック教徒解放問題が絡み、トーリーとウィッグとがそれぞれ候補を推し立て、国論を二分し両党間の代理戦争の様相を帯びたといわれる。シェリーの父ティモシーの後見人第11代ノーフォーク公は、カトリックでウィッグの大立者であったが、実に興味深いことに、当時 the Whig Dr. Johnson と呼称されていた大論客パーとは長年の盟友であり、彼に対し1795年以降 300 ポンドに上る経済的援助し続けた仲でもあった。

この頃ノーフォーク公は折々シェリー家を訪問したと思われる。当時の上流家庭の第一の話題は政治談義であったそうであるが、シェリー自身総長選挙に関しウィッグの候補者 Lord Grenville 擁護の立場から大いに発言したと思われる。なぜならば公はシェリーの政治家としての資質を大いに認め、いずれ父親のあとを襲うように盛んに勧めていた事実があるからである（実際シェリーもそう思い込んでいた節が、彼の書簡から窺われる）。こういうウィッグイズムみなぎる雰囲気の中で、シェリーが高名なパーのことを小耳にはさむ機会は一再ならずあったであろう。同時にパーの著作の中で最も話題をよんだ *A Spital*

Sermon (1801) も。この『サーモン』こそ旧友ゴドウィンとの決別をもたらし、一方ではシェリー初期の思想形成になくはならない秘密の *enichiridion* の役割を果たしたのであった。更にパーと並んで表題に掲げた Robert Fellowes (1771—1847) との結び付きも、本書を経由した可能性が大である。

シェリーがパーの『サーモン』を読むきっかけ、そこから受けた影響の範囲（フェローズに繋がる線も含めて）、あるいはパーとゴドウィンとの論争等については、拙論「詩人は時代の子：P.B.シェリーとサミュエル・パー」『秋田英語英文学』(29, 1987) でかなり詳しく論証を試みたつもりなので、ここでは重複を避けたい。今回は私がシェリーと『サーモン』との関係をつかんだきっかけ、『サーモン』の内容、そしてシェリーがフェローズの作品に接していく経路について、ごく簡単に述べるにとどめたい。

シェリーは、オックスフォード大学在学中父親に宛てたある手紙の中で、神学問題ならばどんな試験にも対応できます、と豪語している。事実この頃の幾つかの書簡には、当時の著名な神学者や説教師を激しく攻撃している場面が多々見受けられる。私は1984年秋からほぼ1年間オックスフォード大学へ留学する機会を得たので、ボドレアン図書館でこれら宗教家達の説教や著作を直接閲覧することが出来た。この調査の過程で浮上してきたのが、ゴドウィンとの仲違いの原因となったサミュエル・パーの『サーモン』である。

本説教の眼目は、ゴドウィンが『政治的正義』で唱導した普遍的博愛主義 *universal philanthropy* 批判であった。パーは、情愛の対象は、先ず、親子兄弟近親祖国のような身近な存在に限定されるべきであると論駁した訳である。このようなゴドウィン批判はパー以前にも何人かいたのであるが、彼の批判はそれにだめを押し形となった。それ迄は無視を決め込んでいたゴドウィンも、旧友パーの突

然の批判には我慢出来ず、*Thoughts Occasioned by the Perusal of Dr. Parr's Spital Sermon, Preached at Christ Church, April 15, 1800: Being a Reply to the Attacks of Dr. Parr, Mr. Mackintosh, the Author of an Essay on Population, and others* (1801) というパンフレットをもって反論したのであった。

この一連の経緯はさておくとして、全162頁中130頁以上を占める注解部分には、おびただしい数のギリシャ・ラテンから同時代に至る思想家達が、その代表的著作の直接引用と共に紹介されている。ざっと数えて50名にも及ぶ一大哲学・宗教事典という趣を呈しているのである。これを見たならば、イートン、オックスフォードを通して古典文学一辺倒の教育しか授けてもらえなかったシェリーならずとも、大いに興味をそそられた筈である。ともかくシェリー初期の書簡及び *Proposals for an Association of Philanthropists* (1812) 等を子細に点検してみると、『サーモン』の学習の跡を明かに認めることが出来よう。

さて、シェリーとフェローズとの関わりであるが、結論を先に述べるならば、共感 sympathy の哲学を縷々説いた彼の代表的著作 *A Picture of Christian Philosophy* (1798) の影響は、シェリーの『アラスター』序文から

代表作『プロミーシュース解放』にまで及んでいると思われる。更に『アラスター』の詩自体についても、フェローズによる Salomon Gessner (1730—88) の *Der erste Schiffer* という牧歌の翻訳 *The First Seaman; or Love Teaching the Art of Navigation* の衝撃の下に書かれた可能性が濃厚なのである〔これについては、第61日本英文学会全国大会(於：青山学院大学：1989年5月)で発表したものを別に纏めるつもり〕。

ではシェリーがフェローズに注目していった経路についてはどうであろうか。フェローズはオックスフォード出身で、彼の先輩格に当るので、何かの機会で知ったということも考えられよう。あるいはシェリーは『ザストロツツイ』(1810)出版に当り、批評家達に賄賂に送るように知人に指示している(ちなみにこのとき使った pouch という動詞を *OED* は金を握らせるという意味の初出として挙げている)。そのためかどうか多くの批評誌が好意的書評を掲載してくれた中で、『クリティカル・レビュー』誌だけがその不道徳性を酷評した。実は、当時同誌の編集をしていたのがフェローズであったので、この線も考えられ得るであろう。

しかし最も確かな可能性は、やはりパーの

『サーモン』であろう。ここでフェローズは、その『キリスト教哲学の肖像』とともに数頁に亙り、寛容の先進的神学者として大きく紹介されている。そして彼はパーに先だって、早い時期にゴドウィン批判を開始していたことも分る。『サーモン』を一種手引書のように珍重していたシェリーがこれを見逃すはずがない。シェリーが当時最も注目していたのが、このような革新的思想家であった。シェリーはアイルランド渡航前ゴドウィンに書き送ったある書簡で、「論争の審判役はお引受けできない」と述べている箇所がある。ここは前後の文脈から判断して、1800年前後のゴドウィンにまつわる論争を知っていることを暗示させるに十分である。

ところで、フェローズのゲスナー訳についてはどうであろうか。ホッグの『シェリーの生涯』によると、シェリーはホッグとの初対面で、開口一番ドイツ文学について語ったと伝えている。同時にシェリーはドイツ語はほとんど出来なかった、といっていることから、シェリーは早くから翻訳を通して、何等かのドイツ文学に親しんでいたのであろう。当時ゲスナーはワーズワスの『序曲』でも言及されるほど話題の詩人だったので、その代表作 *Der Tod Abels* (1758) も話題になったのか

も知れない(ちなみにバイロンは、幼少の頃ドイツ語の家庭教師からこれを読まされた、と述懐している)。

さて、問題の『最初の航海者』については、どういう経緯を経たと推測されるであろうか。偶然という線も否定できないが、最も考えられるのが、ゴドウィンの示唆である。1812年シェリーはゴドウィンとようやく面会することが出来た。ゴドウィンの日誌は、その話題の一つが「ドイツ思想と文学の特質」であったと記している。その際ゴドウィンの口から『最初の航海者』が話題に上った可能性は極めて高い。なぜならばその前年コールリッジから、この詩の翻訳について2回に亙り手紙を受けとっていたからである(実際は完成しなかったようだ)。ゴドウィンからこの話を打ち明けられたシェリーが、フェローズ訳を捜し当てるまでそう時間はかからなかったであろう。

さて、以上見てきたようにシェリーは、仮令交際はなかったにせよ、パーとフェローズと重要な関わりを持っていたように確信する。この二人をシェリー・サークルに迎え入れ、より一層精密な研究調査が行われることを望む次第である。(11月30日受理)

聖霊女子短期大学